

日本における西洋中世写本挿絵研究の歩み

鼓 みどり

History of the Medieval Illuminated Manuscripts Studies in Japan

Midori TSUZUMI

E-mail: midori@edu.u-toyama.ac.jp

Abstract

Manuscript illumination is one of the most important fields of the art of the Middle Ages. The popularity of illuminated manuscript is smaller than other medieval art works (mosaic, wall painting, sculpture, stained glass, architecture) in Japan. However there are a few illuminated manuscripts and fly leaves in Japanese collection. The images of illuminated manuscript remind us of something medieval or western.

This paper looks into a history of studies on illuminated manuscripts in Japan from 1960s to present. Firstly we show how manuscript illumination is commented in art series from 1960s to 90s. Secondly we follow papers and articles on manuscript illumination in "Bijutu-shi", the journal of the Japan Art History Society and so on. Thirdly we present scholarly works on manuscript illumination and facsimile publication in Japan.

キーワード：写本挿絵 中世美術史 日本 ファクシミリ

keywords: Manuscript Illumination, Medieval Art History, Japan, Facsimile

はじめに

日本における西洋中世美術史、特に写本彩飾の研究は、いかなる発展を遂げたのであろうか。西洋中世の書物は、近世以降の油彩画や版画に比べ、国内コレクションはごくまれである。また海外の写本コレクションを借りだす展覧会が企画されることも滅多にない。ヨーロッパを訪れる旅行者が親しむ中世美術は、ロマネスクやゴシック、あるいはより古い教会堂建築とそれを飾る彫刻、モザイク、壁画、ステンドグラス、祭壇画と祭具などの工芸品が中心である。テレビで放映される海外紀行で取り上げられる美術作品も同じようなジャンルで、写本彩飾の紹介は皆無に近い。

しかし中世写本のイメージは、書物の図版はもとより、クラシック音楽のCDジャケット、カレンダー、グリーティングカード、書物の装丁など、私たちの身近に容易に見いだされる。カリグラフィーを学び、中世の装飾書体を使ったカードなどを作る人も増えているようだ。2002年に印刷博物館で開催された開館特別展「ヴァチカン教皇庁図書館展：書物の誕生：写本から印刷へ」は、ヴァチカン教皇庁図書館の所蔵する写本10点とファクシミリ（複製）による展覧会で、写本展と呼ぶにふさわしい充実した

内容であった¹。ファクシミリは非常に高価であるが、各地の大学図書館にかなり所蔵されている。また岩波書店が国際共同出版で1981年以降、ファクシミリを継続的に刊行している。そして筆者が参加した平成20～21年度関西大学学術研究助成共同研究「フランスおよびフランドル写本の美術史的研究」（代表：関西大学文学部 蜷川順子）が、日本における西洋中世写本コレクション調査を目的とすることからも明らかのように、オリジナルの中世写本が国内でコレクションされている。1980年代半ばから、丸善、雄松堂等による写本零葉（綴じられていない、あるいは外され、切り取られた頁）の販売会が催され、好評であると聞く。大学や美術館のコレクションには、完全な状態の写本も見いだされる²。

ところで日本の西洋美術史研究において、写本彩飾はどのように理解されて、どのように論じられてきたのであろう。辻佐保子氏にうかがったところ、1950年代には邦文文献はなく、大学図書館や指導教授の蔵書と写真資料によって作品を知ることから中世美術の研究をスタートされたという。筆者は、日本でどのような写本彩飾研究が発表されたかを確認しようと試みた。学術論文や研究発表、出版物、展覧会などの実績は、国立情報学研究所の提供するCiNii論文情報ナビゲータおよびWebCat Plus図

書情報ナビゲータなどを用いて、かなり詳細に把握できる³。学会誌掲載論文や学会発表は、美術史学会、美学会などのウェブサイトや『美術史 第150冊別冊』を参照した。

1 概説書と美術全集

筆者がおそらく最初に眼にした写本彩飾の図版は、『家庭美術館』（平凡社、1962）に掲載された「ケルズの書」のキリストのモノグラムと「ベリー公のいとも豪華なる時祷書」の「6月」であった。前者の記憶はあまり鮮明ではない。しかし後者の印象は強く、漠然とではあるがヨーロッパ的なものとして記憶した。その後、『講談社版世界美術全集』（1966）や『世界の美術館シリーズ』（1965-71）で図版に親しんだが、写本彩飾については、はっきりとした記憶はない。大学で美術史を専攻すると決めた2年生後期、『大系世界の美術』（学研、1971-75）でカラー図版を探しながら、『西洋美術史』（美術出版社、1977）を読むうちに中世美術、特に写本彩飾にひかれていった。その時点で、日本語の中世美術史専門書は、『人類の美術』（新潮社、1973、1976）をはじめとする翻訳文献のみであった。以来、関心を持った時代や作例について、ひたすら外国語文献を集めて消化する作業を続けてきた。

振り返ってみると、美術史に親しむきっかけや、美術史を理解させる手引きは、概説書によって与えられてきたことが分かる。ことに実物を現地で見ることが難しい西洋中世美術を学ぶ者にとって、良質なカラー図版は貴重である。

70年代の概説書は、おおむね判型の大きい画集として企画されたものが多かった。おそらく高度経済成長期に豊かなさを実感させる調度品として販売されたのであろう。高校生や大学生は、図書室で大型の美術書に親しんだ。後に西洋美術史の概説を教え始めたとき、『大系世界の美術』の解説部分と図版が大いに役立った。学校図書館向けに企画されているので、作品の選定は、教科書に掲載されていることを重視したと考えられる。ただし柳宗玄、『ロマネスク美術』（1972）、『初期ヨーロッパ美術』（1974）、『東方キリスト教美術』（1975）は、大胆なクローズアップを駆使した図版と、独自の感性を貫く文章で中世美術の深遠な世界を伝えているが、概説の予習には使うことができなかった⁴。

80年代は画集タイプではなく、雑誌のように週刊で発売されるオールカラーで手ごろな価格の全集が出版された。そのヒントは「ファブリ世界名画集」（平凡社、1969-72）であろう。1978年から刊行された『朝日百科世界の美術』には、初期キリスト教、ビザンティン、ロマネスク、ゴシック、中世末期、そして写本と工芸の6冊が刊行され、執筆は柳氏を筆頭に、より若い世代の研究者が起用されていた。作家別の雑誌形式シリーズはその後にも頻繁に企画されるが、美術史的な解説をきちんと載せた企画はこの後登場していない。筆者は西洋美術史、さらに日本美術史概説も教える必要があったので、非常に役に立つ全集であった。

二度のオイルショックのためか、80年代の出版は停滞している。近世以降の企画は途切れることはなかったが、中世美術については、『ルーヴルとパリの美術：ルーヴル美術館 2』（小学館、1987）や『メトロポリタン美術全集 3 ヨーロッパ中世』（福武書店、1987）のような美術館コレクションを扱う企画に中世写本彩飾が登場するに過ぎない。もっともルーヴル美術館には写本が所蔵されていないので、パリ国立図書館の名品が紹介されている。筆者はそのうち12世紀までの写本5点の図版解説を担当した。

しかし90年に入ると2つの美術全集の企画において、これまで以上に写本彩飾にスポットが当てられた。まず講談社の〈名画への旅〉の『4 天国へのまなざし 中世Ⅲ』（1992）で「カール四世の黄金文書」、『9 北方に花ひらく 北方ルネサンスⅠ』（1993）で「ベリー公のいとも豪華なる時祷書」、『3 天使が描いた 中世Ⅱ』（1993）で、「ケルズの書」、『モルガン・ベアトゥス』、「グランヴァルの聖書」、『2 光は東方より 古代・中世Ⅰ』（1994）で「ウィーン創世記」が紹介された。この企画はNHKの番組との連動をうたっていたが、原始美術から現代美術をカバーしていたので、実際はかなり自由に構成された。従来の全集とは異なり、10見開きで1つの作品を核に時代を展望する。これは雑誌やムックのような紙面作りであった。筆者は『天使が描いた』でカロリング朝の「グランヴァルの聖書」、創世記扉絵を取り上げた。テーマ作品を決め、構成を考え、図版を選定し、レイアウトに合わせて文章を調整した。原稿依頼が突然だったので、すべて即決だったが、作品紹介のみならず、中世写本の制作工程、物

語表現、金工や象牙浮彫も取り上げた。このシリーズは、比較的手ごろな価格で、視覚的にも多くの情報を載せ、文章のトピックも見出によって手際よくまとまっている。この美術全集は概説、図版と図版解説という従来の構成を大きく変えたと言えるだろう。

〈名画への旅〉を執筆したすぐ後から、小学館〈世界美術大全集〉の打ち合わせが始まった。こちらは〈大系世界の美術〉に続くオーソドックスな美術全集として企画された。中世関係は『10 ゴシック美術Ⅱ』(1994)、『9 ゴシック美術Ⅰ』(1995)、『8 ロマネスク美術』(1996)、『7 西欧初期中世の美術』(1997)、『6 ビザンティン美術』(1997)の順に刊行された。祭壇画や時祷書など華やかなゴシックの巻が出来上がる頃、西欧初期中世の頁割りや図版数で議論していた。このシリーズが目指したのは、日本における西洋美術史研究の第一線研究者を集めた執筆陣、全図版の新規撮影、美術史を専門的に学び始める読者の参考図書として十分使用できる内容であった。中世関係の5冊には、それぞれの時代や地域における写本彩飾が概観され、主要作品の図版と解説を読むことが出来る。巻末には主要参考文献リストや地図、年表などの資料が載せられている。Pelican History of the Art や Skira 社の絵画史シリーズなど、専門領域を決めたら最初に読むべき洋書では当たり前のことだが、和書で充実していたのは、翻訳書の〈人類の美術〉だけであった。

〈世界美術大全集〉は西洋編の後、東洋編も刊行され、中国、朝鮮半島、インド、中央アジア、イスラムなど幅広い地域の美術を体系的に理解できるようになった。このシリーズの後、しばらくは大がかりな全集は企画されないであろう。今後出版形態が大きく変化する可能性もある。ここでは筆者が記憶し、後に携わった美術全集を見てきた。1970年代は限られた執筆者が中世全般を紹介するか、翻訳が中心であった。しかし1990年代には中世美術の多様な分野を専門とする研究者が執筆に携わって中世美術5巻が刊行された。およそ30年の間に、西洋中世美術史の研究状況はどう変化したのであろうか。次に学会誌『美術史』、『美学』などに掲載された論文や研究発表を検討する。

2 学会誌に見られる西洋中世写本彩飾研究

日本における美術史の学会誌は、美術史学会機関誌『美術史』で、1950年に創刊され、最新号は168号(2010)である。これまで『美術史』に掲載された写本彩飾関係の論文は、全21編である。美学会の機関誌『美学』は1951年に創刊され、最新号は59号(2009)である。美学、芸術学の論文が中心で美術史関係の論文は少なく、掲載された中世写本関係の論文は全10編である。

『美術史』第150冊記念別冊(2001)の逐号目録を見ていくと、西洋美術関連の記事が初めて登場するのは、4号(1951)のシモーネ・マルティニに関する文章と図版および解説である。西洋中世美術について最も早い論文は、19号と20号(1957)に掲載された柳宗玄、「十二世紀におけるモザン美術の役割1, 2」である。そして写本彩飾を扱った最初の論文は、35号(1960)の富永良子、「フランス・ゴチック写本にみられる月暦挿絵について」である。美術史学会発足から10年ほどは、西洋美術史の論文数は非常に少なく、まして中世美術はほんの一部であった。しかしその書き手は、先に述べた1960年代から70年代の全集や概説書を執筆、翻訳している。

46号(1962)の辻佐保子、「ラブラ福音書における予言者その他の旧約人物の表現について」は、6世紀シリアの「ラブラ福音書」(フィレンツェ、ラウレンツィアーナ図書館, Plut. I. 56)冒頭部装飾を対象とする一連の研究の一つである。辻佐保子氏自身の解説によると、まず博士論文のテーマとしてこの作品を選び、別のテーマで学位を取得した後も、実地調査とたゆまぬ検討を重ねた成果が、本論文をはじめとする4編にまとめられた⁵。現作品から遠く離れて研究を続けなければならない日本の研究者にとって、氏の姿勢は大いに学ぶべきものと考えられる。

58号, 59号(1965), 65号(1967)に掲載された、前川誠郎・森洋、「テオフィルス『さまざまの技能について』第一巻試訳(一)～(三)」は、中世美術工芸の技法書の抄訳である。すでに『美学』63号(1965)に、高橋栄一、「テオフィルスの技法書について」が、この資料の概要を紹介していた。1996年に全訳が中央公論美術出版社から刊行されている⁶。美術史研究において、作品の調査とともに

に文献資料の検討も重要である。12世紀の画工テオフィルスが残した覚え書きは、絵画、ステンドグラス、金工、エマイユの技法や素材について記しており、西欧ではほぼ唯一の文献である。顔料の名称、原料、製法などが簡潔に記され、非常に重要な資料である。資料の刊行は日本美術史では必須の手続きである。西洋においても古代のヴィトルヴィウスや近世のヴァザーリ、パチェーコなどの著作が想起されるが、その翻訳が着手され始めた頃にテオフィルスの著作が紹介された意義は大きいだろう。

66-67号(1967)の辻佐保子、「コットン・ゲネシスの主題判定」は、6世紀のビザンティン八大書挿絵で、1731年に火災でひどく損傷した「コットン創世記」(ロンドン、大英図書館、Ms. Cotton Otho BVI)の公刊である。この写本はヴェネツィア、サン・マルコ聖堂天井モザイクにコピーされ、またビザンティン八大書挿絵の系統のかなり早い作例である。現在は1986年に出版されたK・ヴァイツマンとH・L・ケスラーのモノグラフ⁷によって、全体像を理解できる。その20年前に辻佐保子氏が作品調査に基づく主題判定と描きおこしを刊行されたことは、日本の西洋美術史研究が海外の文献紹介にとどまっていなかったことを明らかにしている⁸。

78号と79号(1970)の、辻成史、「『パリの五一〇番』写本挿絵中の福音書場面の研究(図像篇)(1),(2)」も、挑戦的な試みであった。この『ナジアンツのグレゴリウス説教集』は、9世紀ビザンティン写本の中でも特に複雑な説話表現で知られ、多くの議論が提唱されている⁹。個別の主題を扱った研究が多い中で、福音書主題をまとめて検討する姿勢は他に類を見ない。『美学』43号(1960)の辻成史、「十一世紀ビザンチン写本における『放蕩息子のたとえ話』の図像の一例について」は、パリ国立図書館ギリシャ語74番福音書の「放蕩息子のたとえ話」挿絵を、13世紀の『ピーブル・モラリゼ』と比較して論じている。2つの作品は制作年代も地域も異なるが、福音書テキストを逐一視覚化する姿勢が共通している。

『美術史』83号(1971)の越宏一、「サンクト・フローリアンの大型聖書本(Cod.XI/1)について——一二世紀・ザルツブルクの一作——」は、ドイツ圏のロマネスク写本を扱っている。越氏は『美学』91号(1972)に「サンクト・フローリアンの大型聖書本：一二世紀・ザルツブルクの写本(大会報告)」

を掲載している。同じ写本の研究成果を、口頭発表と論文で呈示する方式が、この時期から定着していく。

『美術史』101号(1976)の柳宗玄、「ベアトウス黙示録における色彩」(同、『黒い聖母』、福武書店、1986に再録)は、スペイン初期中世写本彩飾を紹介した早い時期の論文である。後で触れるように、モサラベ写本彩飾研究が活発化するの80年代後半からである。柳氏の存在は、モサラベやブリテン諸島の写本彩飾への注目を大いに促したと言えるだろう。

『美学』95号(1973)の齊藤稔、「オットー朝時代における彩飾写本画の美的特性について」は、『美学』87号(1971)に要旨が掲載された同、「オットー朝写本画の特性について(大会報告)」にもとづく。この論文はオットー朝写本彩飾の展開を概観し、年代に沿って中心となった流派を解説した。

80年代は、写本彩飾の学会誌論文がほとんど皆無である。『美術史』、『美学』に論文はなく、『地中海学研究』6号(1983)の篠原田鶴子、「フーケ作『シュヴァリエの時禱書』の二段構成について」があげられるのみである。しかしながら美術史学会の全国大会および例会では写本彩飾についての発表が途切れることなく行われ、1980年から89年にかけて9件の西洋中世写本関係の発表があった¹⁰。1950年から59年には1件、60年から69年には3件、70年から79年には4件の発表が行われたことと比べ、80年代は写本挿絵研究に活気が生まれる兆しがあったと言えるだろう。発表者の顔ぶれもほとんど一新され、先に取り上げた<名画への旅>に執筆した鶴岡、安發、鼓もそれぞれ発表を行っている。なお美学会において、80年代は写本関係の発表は行われなかった。

90年代は写本関係の論文が再び『美術史』に掲載されるようになった。130号(1991)の小林一枝、「『カリーラとディムナ』写本挿絵の形成と伝播——東西美術における動物寓話図像研究序——」は、イスラム写本を扱った初の論文である。同じ説話は西洋にも伝わっており、受容の比較が興味深い。

131号(1992)の駒田亜紀子、「時禱書における聖母子像の諸相——パリ国立図書館ラテン語一一六一番写本を中心に——」と132号(1992)の黒岩三恵、「『シャルル五世のフランス大年代記』のカルトン——写本の制作過程との関連について——」は、

それぞれ1990年と1991年の全国大会で発表を行い、その成果を論文にまとめている。ちょうどこの時期から、大学院博士後期課程の終了時に課程博士の学位を取得することが一般化し始めた。それ以前は満期退学後に業績を積み重ねて論文博士を目指すか、海外で学位を取得するしかなかった。しかし海外から留学生が増加するにつれ、文系の学位取得システムの整備が迫られ、課程博士制度が文学部にも導入された。博士論文の前提条件として学会誌掲載論文を求める場合が一般的になり、以後、学会誌掲載への要望は次第に高まっていく。

134号(1993)の保井亜弓、「マイスター E・S の《形象アルファベット》の愚者について——十五世紀における版画芸術と写本芸術との関連——」も1991年の全国大会で発表された。写本から初期印刷本への過渡期を対象に、愚者の図像を展望している。90年代の『美術史』掲載の中世写本関連論文4編のうち3編が中世後期を扱っている。しかし1990年から99年に行われた発表14件は、ビザンティン(4)、初期中世(3)、ロマネスク(1)、ゴシック(6)と幅広い¹¹。また1995年に雑誌『美術史』の掲載論文は投稿となり、査読制度が導入された¹²。

『美学』172号(1993)の益田朋幸、「ビザンティン写本挿絵におけるヨハネ福音書冒頭部分の絵画化」は、90年代唯一の写本関係論文である。なお大会発表要旨は167号(1991)の栗山守正、「ランブル兄弟の「地獄」図について」(美学会第四十二回全国大会報告)と199号(1999)の保井亜弓、「マイスター E・S とタピスリー：半身像祈念画の一図像をめぐって」(第50回美学会全国大会発表要旨)の2件である。『地中海学研究』13号(1990)の安發和彰、「エル・エスコリアルルのベアトゥス写本挿絵——《第五のラッパの審判》について」は、ベアトゥス写本の紹介に尽力した研究者による図像学的論考である。次の10年間、日本におけるモサラベ美術研究は非常に盛んになる。安發氏の論文や発表、翻訳、一般書や解説がその基礎を用意したのであろう。

2000年から2009年にかけて、『美術史』には7編の写本関係論文が掲載された。『美術史』153号(2002)の拙稿、「『サン・パオロの聖書』扉絵の装飾プログラムについて」と156号(2004)の加藤ひろみ、「《サン・パオロ・フォーリ・レ・ムーラの聖書》の扉画研究——「玉座のカール禿頭王」挿絵、『箴言』扉絵、『使徒言行録』扉絵の予型論的構成につ

いて——」は、2001年と2002年の全国大会での発表にもとづき、9世紀後半に制作された『サン・パオロの聖書』を取り上げた。

157号(2004)の桜井夕里子、「『パルマ福音書』キリスト伝挿絵の図像プログラム」と宮内ふじ乃、「ジローナ大聖堂所蔵ベアトゥス写本の「キリスト伝」プログラム」は、ビザンティンとモサラベ写本に現れたキリスト伝の語り口を取り上げている。宮内氏は2000年、2003年、2009年に口頭発表を行っている。さらに桜井氏は『美学』221号(2005)に「『パルマ福音書』の「マイエスタス・ドミニ」における福音書記者」、『美術史』163号(2007)に「中期ビザンティン時代における「コンスタンティヌスとヘレナ」図像に関する一考察」を発表し、近年にはカッパドキアの壁画について論考を発表している¹³。『美学』214号(2003)の瀧口美香、「ミティリニ福音書写本に見られる特殊なヘッドピース：キリストと福音書記者の組み合わせについて」は、211号(2002)の「東方教会の福音書記者肖像とその機能について」(第五十三回美学会全国大会発表要旨)にもとづく。さらに『地中海学研究』26号(2003)に「ビザンティン福音書写本に描かれるキリスト伝サイクルについて」を発表している。このように桜井氏と瀧口氏は精力的に学会発表を行い、その成果を出来る限り刊行している。

『美術史』157号(2004)の宮内論文に続き、163号(2007)の久米順子、「レオン王国サンチャ王妃の『語源論』写本(一〇四七年)に関する一考察」と165号(2008)の毛塚実江子、「レオンの『九六〇年聖書』写本の対観表装飾—福音書記者像表現を巡って—」は、先にあげた宮内氏とともに、初期中世スペイン写本彩飾研究の隆盛を示している。また毛塚氏は『美学』216号(2004)に「鳥と蛇の戦い」：『ベアトゥス黙示録註解』に描かれたキリスト教動物寓意図像の考察」を発表し、美術史学会では2005年と2007年に発表を行っている。

『美学』216号(2004)の拙稿、「『セント・オールバンス詩篇』の物語イニシャルについて」は、西欧詩篇挿絵研究の一環として執筆され、学位論文の一部をなす。

この時期の学会発表はさらに増加して、全19件である¹⁴。その内訳は、初期中世11件、ロマネスク1件、ゴシック4件、ビザンティン3件、イスラム1件である。初期中世をさらに詳しく見ると、モサ

ラベ写本関連が5件、カロリング朝写本が4件、8世紀以前が2件である。この傾向は学会誌論文ともほぼ一致するが、モサラベ写本の発表はほとんど論文となっているのに対し、カロリング朝写本は半分しか論文になっていない。

『美術史』は投稿数が多く、採択率が50%前後である。投稿制度のもと、口頭発表から論文掲載のステップは研究者自身の意志を前提とするが、高いハードルを越える必要がある。課程博士制度が軌道に乗り、論文博士に疑問の目が向けられる気配がある。今後、学会発表数や投稿論文はさらに増加すると考えられる。西洋中世美術は日本の美術史においてメジャーな分野ではないが、今回研究動向を確認して、その発展をたどることが出来た。一人一人の研究者の努力とともに、半世紀以上にわたり世代から世代へと受け継がれた研究方法や姿勢といったものが西洋中世写本挿絵研究を支えていると言えるだろう。

3 研究書とファクシミリ

美術史研究者にとって、出版は少し複雑な存在である。美術全集や概説書、さらに雑誌記事など一般読者を対象とする商業的な出版物に執筆する機会が比較的多く、学術的な専門書執筆に取り組む必然性を意識しにくい。雑誌連載をまとめて一般読者を啓蒙する著作を刊行して、その分野をより幅広く認知させることも重要であろう。またすでにあげたテオフィルスの技法書翻訳など、資料紹介や研究書翻訳も大切である。1970年代からおよそ30冊の西洋中世写本関係の書物が出版されている。それを一般書、資料、写本学とモノグラフに分けて紹介する。

一般読者に写本彩飾をわかりやすく紹介した早い例は、1975年の斉藤稔、『イニシャルのデザイン：中世写本の装飾文字』（岩崎美術社）である。すべてモノクロ図版であるが、収録された装飾イニシャルの数が多く、非常に幅広い。1987年の辻佐保子、『中世絵画を読む』〈岩波セミナーブックス〉（岩波書店）は、連続講座をもとに執筆されている。モノクロームによる異次元表現の問題を、豊富な事例とともに雄弁に呈示している。1989年の鶴岡真弓、

『ケルト—装飾的思考』（筑摩書房）は、ケルトおよびブリテン諸島の文様装飾をモチーフに、さまざまな視点から展望しており、柳氏の著作に通じる時空を超越する発想が流れている。宮内ふじ乃、『物

語る絵：トゥール（アシュバーナム）のモーセ五書』（聖公会出版会、2009）は、6世紀の聖書『トゥールのモーセ五書』の挿絵18点を聖書本文と照合しながら紹介し、挿絵が説話を語るさまざまな方法を丹念に論じている。著者が序文でふれているように、この写本は制作年代や説話場面の出自がもっぱら問題にされてきた。しかし挿絵そのものが現在に伝えている豊かな語り口にこそ、目を向け耳を傾けるべきではないか。幅広い読者を対象とした体裁であるが、その視点は従来の研究の虚を突いている。このほか展覧会図録や翻訳書があげられる¹⁵。

資料の出版は、すでにふれたテオフィルス『テオフィルス さまざまな技能について』（1996）のみである。写本学関係の書物は、圧倒的に翻訳書が多い。その中で1993年の高宮利行、『西洋書物学事始め』（青土社）は、中世英語研究者であり愛書家として知られる高宮氏が、中世写本の楽しみ方を伝える貴重な書である。19世紀英国の挿絵画家W・クレインによる『書物と装飾—挿絵の歴史』（国文社、1990）のような古典的著作から、現代のカリグラフィであるマイケル・ガリックによる『書体の源泉』（千塚館、1992）まで、写本学関連の書物は幅広い¹⁶。

写本彩飾の研究書は、辻佐保子氏の論文集3件、すなわち『ビザンティン美術の表象的世界』（岩波書店、1993）、『中世写本の彩飾と挿絵：言葉と画像の研究』（同、1995）、『ロマネスク美術とその周辺』（同、2007）に集約される。ここには著者が長年にわたって取り組んでこられた写本彩飾およびキリスト教図像学の成果がまとめられている。本文は発表当時の内容を保ちながら、脚註や補遺で可能な限りのアップデートをはかっている。特に初出以降発表された邦文文献について、きめ細かく目を配る姿勢に、中世美術史研究を牽引してこられた氏ならではの後進への暖かく厳しいまなざしが感じられる。拙著『ユトレヒト詩篇挿絵研究—言葉の織りなしたイメージをめぐる』（中央公論美術出版、2006）は、9世紀の『ユトレヒト詩篇』挿絵を中心に、テキスト本文にもとづく西欧の詩篇挿絵の見取り図を提案した学位論文の出版である。研究開始から四半世紀を経て、10数編の論文を加筆修正編纂した。2005年頃から課程博士論文の出版が盛んになっており、写本彩飾の分野でもビザンティンやモサラベで出版が予想される¹⁷。

辻成史氏の監訳による、K・ワイッツマン、『古代・中世の挿絵芸術：その起源と展開』（中央公論美術出版、2007）は、西洋中世写本研究者のみならず、日本東洋の絵巻や仏教説話研究者にも重要視された古典的著作である。現在は方法論的な見直しも提案されているが、説話表現に文法のような規則を見いだす考え方は、さまざまな分野において示唆に富んでいる。この他の翻訳として、鶴岡真弓氏によるB・ミーハン、『ケルズの書』（大修館書店、2002）がある。

すでにふれたように、ファクシミリの刊行は1981年から岩波書店が国際共同出版として行い、これまで19件が出版されている。1981年から1992年まで、ドイツのベルザー社と共同でヴァチカン教皇庁図書館所蔵の写本11冊のファクシミリを刊行した¹⁸。その後1994年からは、さまざまな図書館に所蔵されている写本を選んで8冊のファクシミリを刊行している¹⁹。ファクシミリの出版は、専門の出版社が装丁や羊皮紙の穴、傷に至るまでオリジナルを忠実に複製する。オーストリアのADEVA、ドイツのベルザー、スイスのファクシミリ・フェルラークなどの老舗よりも、近年はスペインのパトリモニオ、モレイロとイタリアのトレッカーニなどが活発である。岩波書店は各国で出版されるファクシミリの中から選りすぐって解説編を翻訳して出版している。ファクシミリは1冊数十万から百万円するので個人が所蔵するのは難しい。WebCatで調べると岩波のファクシミリは10から20数の大学に所蔵されていることが分かる。また岩波書店は、ファクシミリのダイジェストを刊行している²⁰。従来ファクシミリの解説編は最新の研究成果をほとんど反映しない場合が主流であったが、パトリモニオやモレイロは充実した解説編を複製とは別に発行している。岩波はカラー図版を豊富に使って、ファクシミリ解説編よりも魅力的な書物を提供した。

おわりに

写本挿絵研究において、オリジナルに触れる機会は、乗り越えるべき数多くのハードルに比して実に限られた一瞬に過ぎない。複製技術の向上により羊皮紙の感触まで再現するファクシミリが登場し、オリジナルの写本は保存のためになるべく閲覧させない所蔵館が増えていくであろう。写本から遠く離れ

た日本の写本研究者にとって、ファクシミリは非常に強力な研究ツールである。どれだけ鮮明な図版があっても、先学の研究を集めても、書物としてのサイズやページをめくって挿絵に見入る鑑賞行為を忘れてしまっただけでは作品の本質には迫れないだろう。

英国オックスフォード大学ボードリアン図書館写本室ではファクシミリが開架で自由に参照できる。大英図書館やフランス国立図書館では、ファクシミリは写本室に閉架で収蔵され、個別に請求して閲覧する。日本の大学に所蔵されているファクシミリは、貴重本に指定され、外部からのアクセスは容易ではない。親しい研究者にお願いして1回閲覧させていただくのが精一杯である。これまで見てきたように、写本彩飾研究は今後も発展していくであろう。今後の発展を支えていくために、研究者に公開されたファクシミリのコレクションが国内に必要となっている。

-
- 1 印刷博物館、『ヴァチカン教皇庁図書館展：書物の誕生：写本から印刷へ』、印刷博物館、2002。ヴァチカン図書館のコレクションが本格的に紹介された画期的な展覧会。展覧会実現の経緯と出展写本の概要について、辻佐保子、「聖書の手写本とその彩飾」、同カタログ、13—15頁および作品解説を参照。
 - 2 辻佐保子、「中世の写本彩飾の展開」、『芸術新潮』1977年12月（初出、『天使の舞いおるところ』、岩波書店、1990年、3—18頁（再録）、特に付記に記されている傾向が現在に続いている。
 - 3 CiNii 論文情報ナビゲータ <http://ci.nii.ac.jp/>、WebCat Plus 図書情報ナビゲータ <http://webcatplus.nii.ac.jp/>
 - 4 柳氏は論文や概説書とともに『芸術新潮』、『図書』など多数の雑誌に中世美術を紹介する文章を寄稿している。のちに『西欧の誕生』（新潮社、1971）、『虚空散華 生命のかたち』（福武書店、1986）、『黒い聖母』（福武書店、1986）として刊行され、近年『柳宗玄著作選』（八坂書房、2005～）にまとめられた。
 - 5 辻佐保子、『中世写本の彩飾と挿絵一言葉と画像の研究』、岩波書店、1995、pp.1-3。同書I『ラブラ福音書』の諸問題（pp.13-183）に4論文が収録されている。3論文の初出は、「福音書

- 対観表頁の装飾について-ラブラ福音書挿絵研究, 『オリエント』7(1), 1964; 「対観表頁の文様構成について-ラブラ福音書挿絵研究, 『武蔵野美術大学研究紀要』, (2), 1965; 「ラブラ福音書「聖母子」像の研究, 『名古屋大学文学部研究論集 哲学 20』, 1973。
- 6 テオフィルス著; 森洋訳編, 『さまざまの技能について』, 中央公論美術出版, 1996。
- 7 Weitzmann, K. and Kessler, H. L., *The Cotton Genesis: British Library, Codex Cotton Otho B VI*, Princeton, N.J., 1986.
- 8 辻 佐保子, 「コットン・ゲネシスとサン・マルコ<バベルの塔>の表現をめぐって」, 『オリエント』10(1・2), 1968, pp.153~166; TSUJI, Sahoko, *La Chair de Maximien, la Genèse de Cotton et les mosaïques de Saint-Marc à Venise: à propos du cycle de Joseph, Synthronon: art et archéologie de la fin de l'Antiquité et du Moyen âge: Recueil d'études dédié au Prof. Grabar, André*, Paris, 1968, pp.43-61; Idem. *Nouvelles observations sur les miniatures de la Genèse de Cotton: cycles de Lot, d'Abraham et de Jacob*, Cahiers archéologiques 20, 1970, pp.29-46.
- 9 BRUBAKER, L., *Vision and meaning in ninth-century Byzantium: image as exegesis in the homilies of Gregory of Nazianzus* (Cambridge studies in palaeography and codicology), Cambridge, 1999, pp.1-18, 443-473 (Bibliography).
- 10 『美術史』第150刷記念別冊, 2001, pp.46-53。
1980年から89年の発表題目
1980年: 永澤峻, 「ダビデとゴリアテの戦いの図像の変遷 (3世紀から10世紀まで)」
1983年: 鼓みどり, 「ユトレヒト詩篇挿絵における比喩の映像化と擬人像の役割」
: 篠原田鶴子, 「フーケ作『シュヴァリエの時祷書』の二弾構成について」
1985年: 鶴岡真弓, 「アイルランド装飾写本におけるケルト文様」
: 前川久美子, 「ギョームドマショー<作品集>の成立とその構成」
: 関口敦子, 「シャルルマーニュ宮廷派福音書写本におけるイニシャルページの装飾構成」
1986年: 安發和彰, 「<<ベアトゥス>>写本における「太陽を着る女」(黙示録第12章)の図像をめぐって」
: 富永良子, 「「ルネ王の画家」に関する最近の研究動向」
1987年: 石塚晃, 「Paris, Bibl. Nat. cod. Gr. 510の『ダヴィデの塗油』-図像並びにビザンチン写本に占める位置」
- 11 『美術史』第150冊記念別冊, pp.53-63。
1990年: 水島ヒロミ, 「聖カスバート伝挿絵(Oxford, University College, ms. 165)の成立に関する一考察」
: 駒田亜紀子, 「時祷書における聖母子像の諸相——パリ国立図書館ラテン語一一六一番写本を中心に——」
: 沼田英子, 「『ベッドフォードの時祷書』「受胎告知」のページにおける建築表現について」
: 小林一枝, 「『カリメーラとディムナ』写本挿絵の形成と伝播—東西美術における動物寓話図像研究 その一—」
1991年: 黒岩三恵, 「『シャルル五世のフランス大年代記』の制作過程——制作の三段階に見られる国家の共同作業の実態を中心に——」
: 保井亜弓, 「愚者の変容—15世紀における初期版画と写本芸術の関連—」
: 小林典子, 「『ブシコー元帥の時祷書』 fol. 65v, fol. 90vの背景表現をめぐむ問題」
1993年: 五十嵐節子, 「ヨハネ黙示録と中世初期の支配者像」
1994年: 木戸雅子, 「『バシリオス二世のメノロギオン』の8人の画家—新たな構図の発生とその構図原理, 建築背景を中心に」
: 田中久美子, 「愛に囚われし心の書について—投げかけられた蔭=投影を中心に」
1996年: 川口雅子, 「パリ国立図書館所<<ドロゴの典礼書>>の「キリスト昇天」について」
: 永澤峻, 「<<パリ詩篇>>挿絵中の<<モーセの紅海渡渉>>を表わす挿絵について」
1997年: 瀧口美香, 「Codex Vaticanus Graecus 333の挿絵に見られるタイポロジーについて」
: 安發和彰, 「ベアトゥス写本の『カトリック教会』図」
- 12 『美術史』第150冊記念別冊, 美術史学会の歩み(略年表)平成7年, p.52
- 13 櫻井夕里子, 「トカル・キリセ新聖堂(カッパド

- キア, ギョレメ地区)の装飾プログラム」, 『地中海学研究』31, 2008, pp.3~22.
- 14 美術史学会HP
- 2000年: 宮内ふじ乃, 「ジローナ大聖堂所蔵ベアトウス写本の「天図」に見られるキリスト一皇帝像をめぐって」
- 2001年: 鮫島正安, 「トリノ時祷書《聖ユリアヌスの渡河》の制作年代について」
: 鼓みどり, 「『サン・パオロの聖書』扉絵の装飾プログラムについて」
- 2002年: 加藤ひとみ, 「《サン・パオロ・フォーリ・レ・ムーラの聖書》の挿絵研究 —予型論的プログラムの構成とその性質—」
: 瀧口美香, 「挿絵入りビザンティン写本に見られる「聖遺物箱」としての機能について」
- 2003年: 宮内ふじ乃, 「ジローナ・ベアトウス写本巻頭挿絵の「キリスト伝」プログラム」
: 武井美砂, 「《ウィンチェスター聖書》の挿絵—ロマネスク大型聖書本における物語挿絵の場面解釈をめぐって—」
- 2004年: 鎌田由美子, 「15世紀末ペルシア・ティームール朝挿絵入り写本『鳥の言葉』(メトロポリタン美術館, Fletcher Fund, 1963. 210)の成り立ちについて」
: 高木真喜子, 「模倣者そして創造者としての〈ロアンの画家〉」
: 駒田亜紀子, 「ジャン・ル・マンダール三世の『歴史物語聖書』——流転の中世末期彩飾写本——」
- 2005年: 長友瑞絵, 「《ベルンのフィシオログス》挿絵研究—そのプログラムに関する一考察—」
: 濱西雅子, 「初期中世の黙示録写本挿絵サイクルにおける挿絵とテキストの配列関係—ヴァランシエンヌ本とパリ本を巡って—」
: 毛塚実江子, 「『レオン960年の聖書』対観表における福音書記者表現について」
- 2006年: 櫻井夕里子, 「中期ビザンティン時代における「コンスタンティヌスとヘレナ」図像に関する一考察」
: 久米順子, 「レオン王国サンチャ王妃の『語源論』写本(一〇四七年)をめぐって」
- 2007年: 毛塚実江子, 「『九六〇年のレオンの聖書』冒頭挿絵を巡って二つの「荘厳のキリスト(マイエスタス・ドミニ)」と福音書記者像」
- 2008年: 吉田泰子, 「インスラー写本から「タシロ聖杯様式」の動物組紐文へ—文様の構成原理に見るノーサンブリア美術の影響」
- 2009年: 宮内ふじ乃, 「《トゥールのモーセ五書》写本における物語絵の作画原理」
: 辻絵里子, 「中期ビザンティン余白挿絵詩篇の図像生成」
: 田辺めぐみ, 「マルグリット・ドルレアンの時祷書(BnF. ms. lat. 1156B)における余白装飾の両義性」
- 15 越宏一, 『挿絵の芸術: 古代末期写本画の世界へ』, 朝日新聞社, 1989; W・フォグラウ, 『修道院の中のヨーロッパ: ザンクト・ガレン修道院にみる』, 朝日新聞社, 1994; M・カラザーズ, 『記憶術と書物 中世ヨーロッパの情報文化』, 工作舎, 1997; M・カミール, 『周縁のイメージ: 中世美術の境界領域』, ありな書房, 1999; 越宏一, 『線描の芸術: 西欧初期中世の写本を見る』, 東北大学出版会, 2001; 印刷博物館, 『ヴァチカン教皇庁図書館展: 書物の誕生: 写本から印刷へ』, 印刷博物館, 2002; 東京芸大付属図書館, 『輝く書物: 中世写本ファクシミリ選: 東京藝術大学附属図書館所蔵貴重資料展』, 東京芸術大学, 2008; M・キャヴィネス, 『中世における女性の視覚化—視ること, スペクタクル, そして視覚の構造』, ありな書房, 2008; F・ザクスル, 『イメージの歴史: ザクスル講義選集』, ブリュッケ, 2009.
- 16 他にリチャード・ド・ベリー, 『フィロビロン: 書物への愛』(講談社学術文庫), 講談社, 1989; T・ノード画, P・セリグマン文, 『装飾文字の世界: カリグラフィー入門』, 三省堂, 1996; スタン・ナイト, 『西洋書体の歴史: 古典時代からルネサンスへ』, 慶應義塾大学出版会, 2001; エドワード・ジョンストン, 『書字法・装飾法・文字造形』, 朗文堂, 2005.
- 17 東京芸術大学では, 学位論文を私家版で発行している。中世写本関連では, 武井美砂, 『《ウィンチェスター聖書》の挿絵: 12世紀イギリス・ロマネスクの写本画の研究』, 私家版 学位論文, 2007; 高木真喜子, 『《ロアンの大時祷書》: ゴシック末期のフランス写本画の研究』, 私家版 学位論文, 2007
- 18 B・ブレンク他, 『聖ベネディクト, 聖マウルス,

聖スコラスティカの祝祭のための読誦集：Vat. Lat. 1202 ファクシミリ版』, 岩波書店, 1981；
 プトレマイオス, 『宇宙誌：Urb. lat. 277 プトレマイオス；ファクシミリ版』, 岩波書店, 1984；
 C・ベルテッリ他, 『Vergilius romanus = ウェルギリウス・ロマヌス：Vat. lat. 3867；ファクシミリ版』, 岩波書店, 1985；K = A・ヴィルト他, 『貧者の聖書 ヴァティカン教皇庁立図書館蔵本 パラティーナ・ラテン語写本 871codex Palatinus Latinus 871』, 岩波書店, 1985；G. モレルロ他, 『Novum testamentum：Vat. lat. 39；ファクシミリ版』, 岩波書店, 1985；V・フマガッリ他, 『Vita Mathildis = カノッサのマティルダ伝：Vat. lat. 4922；ファクシミリ版』, 岩波書店, 1986；A・ロート他, 『アレクサンデル六世クリスマスミサ典礼書 ファクシミリ版』, 岩波書店, 1987；E・ケーニッヒ他, 『薔薇物語 Codex urbinatus latinus 376』, 岩波書店, 1989；S・デュフレンヌ他, 『レオの聖書：ギリシア語旧約聖書；Reg. gr. 1A, Reg. gr. 1B』, 岩波書店, 1989；G・モレロ他, 『諸聖人伝 Vitae sanctorum, Vat. Lat. 8541』, 岩波書店, 1992；P・カナル他, 『聖母マリア讃詞集：codex Vaticanus graecus 1162』, 岩波書店, 1992. この国際共同出版の企画すなわち作品および執筆者の選定は、岩波の編集委員であった辻佐保子氏らを中心に、専門的見地から行われた。

19 E・ケーニッヒ他, 『ベリー公のいとも美しき聖母時祷書 BNF, Manuscrit Nouv. acq. lat. 3093, パリ国立図書館蔵本 ファクシミリ版』, 岩波書店, 1994；E・ケーニッヒ他, 『トリノ = ミラノ時祷書. トリノ時祷書残闕』, 岩波書店, 1996-97；O・マザール他, 『クロイの時祷書』, 岩波書店, 1997；G・エチェガライ, 『ベアトゥス黙示録註解：ファクンドゥス写本』, 岩波書店, 1998；M・C・ビバンコス 他, 『Beato de Liébana : códice de San Andrés de Arroyo (ファクシミリ)』, 岩波書店, 2000；マルコ・ポーロ, 『全訳マルコ・ポーロ東方見聞録：『驚異の書』 fr. 2810写本』, 岩波書店, 1998；F・トニオーロ他, 『ボルソ・デステの聖書：Ms. Lat. 422-423 = La Bibbia di Borso d'Este』, 岩波書店, 2001；N・モーガン, 『黙示録：MS R.16.2：ケンブリッジ・トリニティ・カレッジ図書館蔵本ファクシミ

リ版』, 岩波書店, 2006.

20 マルコ・ポーロ [著], F・アヴリル, M = T・グセ (解説), 『全訳マルコ・ポーロ東方見聞録：『驚異の書』 fr. 2810写本』, 岩波書店, 2002；F・ベスフルグ, E・ケーニッヒ 解説, 『ベリー公のいとも美しき時祷書』, 岩波書店, 2002.

付記

本稿は平成20～21年度関西大学学術研究助成共同研究「フランスおよびフランドル写本の美術史的研究」(代表：関西大学文学部 蛭川順子)の研究報告書より転載・加筆したものである。

(2010年5月17日受付)

(2010年7月14日受理)